

「芽生えの紅葉」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

落葉広葉樹は、この時期、黄色、橙、赤、紫と、さまざまな色に変化する。今年芽生えたばかりの、小さな落葉樹も紅葉するのだろうか?ふと、そんなことを考えて、森の中を歩いてみた



さっそく見つけた。ナラの幼木である。このあたりにはミズナラが多いのだが、コナラもある。葉の見分けが難しいのだが、これは鋸歯の形状と色から、ミズナラだろう。この春、ドングリから芽生えたのだろう。



広い森の林床に、ポツンと「咲いて」いた。葉っぱは5枚しかなく、高さも10cmほど。葉が落ちたら、細い木の棒になってしまう。このあたりには、多い時は1.5mも雪が積もる。1月になると、「木の棒」は、完全に雪の下に埋もれてしまうだろう。



カエデも見つけた。これも葉っぱは6枚しかない。しかし、大きな木と同じように、一人前に紅葉している。このまま盆栽にしたら、美しいだろう。



カラマツの落葉樹なので、「黄葉」が見られる。写真は、昨年植えられたばかりの幼木だが、やはり葉の色が変わっている。ただし、背後のカラマツの森に比べると、少し色づきが遅いようだ。

いくつかの樹木を観察して、木々の生命力を実感できた。落葉樹が、秋に葉を落とす主な理由は、雪の重さから枝を守ることである。今年芽生えたばかりの、こんなに小さな木でも、秋の終わりを感、冬の到来の準備をしている。植物はどんなに小さくても、大木と同じ季節の営みをしているのだ。(つづく)